高田建築事務所　巣舞るメッセージ500回記念2010

第38回 ライブトークフォーラム「育む」

シンポジウム「人を育む環境」街づくりと人づくりを

アート・建築・歴史の各分野から語る

㈱高田建築事務所（長岡市摂田屋・高田清太郎代表取締役）は、ユニークな住宅建築で町づくりに貢献する住宅建築で評価が高い同社では、巣舞るメッセージと称した住宅見学会を開催している。その500回にあたる記念として、10月10日ホテルニューオータニ長岡NCホールで、第38回ライブトークフォーラム「育む」を開催した。

基調講演には河井継之助記念館館長の稲川明雄氏が「龍馬を育てた女性たち」として講演。引き続いてのシンポジウムには、司会に近藤麻智子氏（アナウンサー）、パネラーに斎藤公男氏（日本大学名誉教授、構造デザイナー、日本建築学会前会長）、秋山孝氏（多摩美術大学教授、秋山孝ポスター美術館長岡館長）、稲川明雄氏、コーディネーターに高田清太郎氏が出演した。

町は、「間知」であるとし、人が快適に生活するための空間を大切にする同社のシンポジウムに、大勢の参加者たちは感銘を深くしていた。

「人を育む環境」をテーマにしてのシンポジウム

感動と感謝の年に

高田清太郎社長挨拶

感謝の気持ちを伝える高田社長

皆様ようこそおいでくださいました。ありがとうございます。

常日頃は弊社をお引き立て頂き、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、ライブトークフォーラム・タカダは今回で第38回を迎えることが出来ました。

そもそもライブトークフォーラムとは弊社にて建築をしてくださった方々が講演者になったり、聴衆になっていただく事で開催されている会です。

巣舞いづくりの話をしていると建築主様の話の中に素晴らしい特技や思想・哲学があることに感動し、この話をわたし一人で聞くのではなく、多くの方に伝えたいと言う想いから始まりました。それが22年前です。

同時に弊社巣舞るメッセージは今年500回目を迎えました。この「感動と感謝」をお届けする一年と決めさせて頂いた次第です。大きな柱として8月3日の長岡花火には、高田建築事務所と愉快な仲間達でベスビアス超大型スターマインを嘉瀬花火師さんによって打ち上げていただきました。

そしてもう一つの柱は本日の「育む」をテーマにしたシンポジウムです。

初めての第一回見学会は28年前1982年の暑い夏の日のことでした。個性ある巣舞いは図面だけでは分からない、実際の空間の中に入って確認することが出来ます。500回目を迎えるに当たり、あらためて見学会場として提供してくださった皆様、会場に足を運んでくださった皆様に本当に「ありがたい」の一言であります。

来年、弊社は創立35周年を迎えます。完成棟数が丁度2000棟を数えます。弊社に巣舞いづくりをご依頼くださった縁様（建築主様の築と縁の造語）のお陰と心から感謝申し上げます。

これからも人生の一大事業である巣舞いづくりの大航海に出かけられる皆様の同伴者として弊社一同は皆様のニーズに答えるべく努力を重ねてまいりたいと決意新たにしているところであります。

ここで、弊社の紹介を少々させていただきます。

1950年、タカモク（旧・高田材木店）を親父が創業して60周年になります。

1976年、高田建築事務所に創立させていただきました。来年35歳になります。当初は木造が主流でしたが、現在ではRC造・S造・ハイブリッド工法全般にわたって取り扱わせていただいています。

建築コンペ（設計競技）にて30近くの入賞を果たすことが出来ました。実はこの賞は、私達に対してではなく、そこに住まわれる方の想いが形になり、物語になったのですからその建築主様に対する表彰状になるわけです。

見学会場には夢と物語が沢山ちりばめられています。今後とも足を運んでいただけたら幸いです。

本日は大変ご多忙の中お出掛けくださり感謝申し上げます。今日の会がきっと「楽しく為になる」会になることを祈念してご挨拶とさせていただきます。

最後に、皆様ご家族様のご健康とご平安を心よりお祈り申し上げます。

斎藤氏プレゼンテーション

斎藤　皆さんこんにちは。高田清太郎さんから、今日は15分か20分で話すようにと言われております。今回「人を育む」という非常に難しいテーマですが、「人の知力」という言葉を入れさせて貰いました。社会・人間・自然という言葉を背景として、社会の諸問題を人間はどうやって解決するかということ。スピードの速い社会の変化と人間はどう立ち向かうのかという課題に、「知力」という、好奇心あるいは想像力についてスライドを見ながらお話したいと思います。

自己紹介ということですが、私はざっと50年前に大学を卒業いたしました。1964年のオリンピック施設計画に参画しいろんなことを感じました。1つ強烈に思い出すのは本当に小さな紙の模型をいくつも作りまして丹下健三さんが、ディスカッションしながら絞り込んでいく。最後は都市であるとか空間、建築、あるいは技術、全てをいわゆるオリンピックなデザインとして作りあげていくのですね。人間の想像力というのでしょうか、それは本当にすごいなと感じました。もちろん当時はコンピューターがありません。全部想像力と手廻し計算器とかそんな程度のものでできたわけです。人間の知力、想像力はすごいなあとその時非常に感じました。

建築の世界はいろんなものを相手にしています。安全性・経済性、特に地震のこともあります。どうやって建物を合理的につくるかは中々難しい課題です。

ところで身の廻りには沢山のプロダクツがあります。使い易く、コストをおさえ、格好いいプロドタイプを生み出すのに膨大なエネルギーを注ぎます。建築の世界もこのエンジニアリングデザインに通じていますが、大きな違いがあります。

工期がない、お金もない、加えてその地域の特性。多分建築の世界は車の設計よりも難しいのではないでしょうか。そういう時、何が1番必要かと言うとやはり魅力的なものを作ろうというイメージとそれをどう実現していくかというテクノロジーがつねに融合しあってお互いにそれを触発しあって、それで最終的には統合する。その両者が交差するような目線が重要であると思います。

簡単に言えば日本の匠の時代。そんなことを思いながら学会長になった時に、ちょうど皆さんご存じの姉歯事件が起きました。行政の対応も非常に早かったわけです。学会としてどうしようかという時に思いついたのが「模型で楽しむ世界の建築」という展覧会（AND展）です。

アーキテクチャー（建築）とエンジニアリング・デザインを結合させたのがアーキニアリング・デザイン（AND）という言葉なのですが、たくさんの模型を作りました。歴史から都市、あるいは住まいの問題も含めて学生諸君にいろんなことを考えて貰いました。古今東西の名作・傑作あるいは話題作をどういうふうに見せたら、その仕組みや秘策が面白いということが伝わるだろうかということを考えました。それを一昨年の秋に東京でやりました。素晴らしい展示会だったので、それをぜひ全国にまわそうということで福岡から札幌までぐるぐる10会場をまわりました。今年の夏、グッドデザインエキスポに応募し、見事グッドデザイン賞も頂きました。

これは私にとっても嬉しい建築学会にとっても誇るべきニュースと思っています。実はこの展示会ですね、大変短い中でやったのですがなぜうまくいったかというと、実は秘密があります。それは『空間×構造×物語―ストラクチュラル・デザインのゆくえ』（彰国社・2003）という私の著書です。この本が海外で翻訳され、韓国とか中国とかで読んで貰っています。この本には高田さんの作品を掲載しています。

この2月に最後の10会場目の「凱旋展」が東京でありました。このとき大変嬉しいことがありました。『建築ノート』という雑誌が出版され、その中に秋山先生のポスターが載りました。実はこれはアルプスの上に架かる橋（サルギナトベール橋）の絵なんですね。その上にいくつかのスケッチを重ね、それらを解説していったものが『建築ノート』ということになります。中に「マチュピチュ」という街を紹介しています。世界遺産の中で人気ナンバー1のところですが、さらにそのあとで「アルベルベッロ」（イタリアの都市、トルッロという屋根をもつ建物が約1000軒ある）という街の話も続いております。

おもしろいのは小さな石片を重ねて空間を作ることですね。子供達が積み木をしながら、少しずつこうずらしていくと「あっ！ここに空間ができる」ということを発見する。原理は簡単です。そういうつたない技術からやがてローマ帝国の大きなアーチが生まれてくるわけです。

錦帯橋と太鼓橋は根本的に違うという話も興味深いでしょう。まあそんなことで今回の展覧会にはとにかく子供達に大勢来て貰おうと思いました。触ってみると「ガウディはこういうふうに重力でできているのだよ」「重力はこういうふうに形を作るのだよ」など人間の工夫がいかに面白いかが分かります。

最近、私が経験した「想像から創造」への例をお話ししましょう。1つ目は「弓」。私の父は80才になっても現役で弓を引いていました。この弓の原理がなかなか面白い。ひょっとしたら弓を建築に使えないだろうかということを考えてみました。それが張弦梁です。高田事務所のオフィスもそうですが本当に素晴らしい建築空間です。それから「酒田の国体体育館」でも同じ原理を使って建築家の谷口先生と作りました。非常に魅力的な技術とデザインとの融合です。それから大きいものでは前橋市（群馬県）の「グリーンドーム前橋」もそうです。

2つ目のイメージは「はさみ」です。「はさみ」は皆さんご存じのように折りたたむことができます。あっという間に人力だけで素敵なドームの空間造形ができてしまいます。名古屋の愛地球博（05）でも半年程休憩所として活躍しました。

3つ目のイメージは人間の身体です。動くということを考えると、ガンダムは難しいですけれども、遥かに優秀な構造は人体も含め生物の世界です。これを使わない手はないだろうと思います。かつてバックミンスター・フラー（1895年―1983年）がテンセグリティ（張力結合体）というものを考えました。時間がないので今日は説明を省略いたしますが、私はその発展形として「テンセグリック構造」を追求しています。

そんな折、秋山先生、長岡商業高校の皆さんから学校創立100周年事業として何かプロジェクトをということで、このシステムを応用して頂きました。お陰様で楽しい緊張した時間を過ごさせて貰いました。

まず小さい模型を作り、いろいろとスタディをくり返しました。組立て作業では学生諸君も頑張ってくれました。

工場では精密にできましたがコンクリートとアンカーの鉄筋が1㍉でも狂っていると、台座に入らない、この瞬間が1番の山場です。おそらく高田さんは心臓が止まるほど緊張されたと思いますが、もちろんこともなげにポンと収まりました。

この構造（テンセブリック・タワー）は世界で初めてだと思います。そして想像力ということで言いますと、完成した後でこのモニュメントが雪の中でどう立っているかを一生懸命考えました。大雪の時、強風や地震もあるかも知れません。ということで今年の冬は長岡にかなり通わなければならないようですが、また美味しいお酒が飲めることを楽しみにしています。ご静聴、ありがとうございました。

斎藤公男氏

明日の未来を架ける「リプチの森」素晴らしい模型の数々が紹介

秋山氏プレゼンテーション

秋山　ぼくのプレゼンテーションは美術を通して「育み育みあう」ことを考えていこうという試みです。

秋山孝ポスター美術館長岡のコンセプトを簡単に紹介します。この美術館はポスター作品の展示、それから長岡の地域に貢献する研究・教育を目的とした展覧会、企画展、講演会などを行います。美術館大学では全国からさまざまな先生をお呼びしたりぼくが講演したりして、街に役立つことは何かを美術を通して考えています。

美の神が宿るようにしていこうとして今年でやっと1年がたちました。1つの例として近くの小学生達（上組小・2年生）が集まってきました。地域を探検する授業で訪れました。この子供たちの心の中に徐々に美が宿ると思うととてもうれしく思います。来てくれたことに非常に感謝しています。

数学者の話をちょっとさせて貰います。数学者の岡潔（1901年―1978年）は「心が豊かで情操教育がしっかりされている人が結果的には人を育てる。美しいと感じる心の今日の情緒が明日の頭を創る」ということを語っています。

やはり見るということは考えるということ。子供たちは見ながら考えています。何度も繰り返すと心の奥の中にじんわりと入ってきます。このぼくのポスター作品を見てください。「たとえどんな子供でも愛は必要です」と訴えています。稲川先生が言っている愛に包まれている世界がその人の心を作っていくということがお分かりでしょう。というように人の心の中に深く強く入れるイラストレーションはどういうものなのかということをぼくは研究し表現しています。

人間の子供とゴリラを一緒に育てたケースがあります。ところが人間の子とゴリラの子も同じようになぐりがきを描きました。ところが、人間の子は円（まる）の中に目の点と口らしきものを書いた。人間は見立てでビジュアルコミュニケーションができた。ゴリラはそれができませんでした。ぼくは絵のはじまりを研究するために1990年にぼくの子をモチーフに「らくがき」という本を出版しました。その中に子供が2歳と11ヶ月かに書いた絵は1番大きいのは母親。次に妹がいて自分がいる。お父さんは存在感が全くありません。やはり1番大きいのは母親です。

原始絵画で一番重要なのは生きるためのものです。しかし、子供は母親とのコミュニケーションです。子供はいつも家族と1番目分に大切な近い人を描きます。これらは、ほとんどがコミュニケーションのためのもので共感を求めた絵ということになります。たとえばお母さんと上野動物園に行ったときなど、帰ってきたらすぐ絵を描き始めます。それは楽しかった感動を共感したいからです。

若い時、よく家族でぼくの展覧会のための旅に回っていました。そのときに、よく世界の美術館を訪れ家族で絵を見ました。案外、子供たちも真剣に集中して見ています。ぼくは子供が心の中にその喜びを焼き付けているかのように見ているように思いました。見るということは言葉を越えているので言葉が出なくなる。魅力的な感動を植えつけているのです。

僕のワークショップは大人気です。子供たちはひたすら描く。何が楽しいかというと、手でこすっているその振動が、情報が脳にいく。手を動かすことは脳を動かすこと。表現の中身を探っていくのです。

人とのコミュニケーションに絵が必要であることは間違いありません。美術館がどうしても必要なのです。そこではたとえどんな子供でも愛が必要不可欠です。

秋山孝氏

高田氏プレゼンテーション

高田　弊社のテーマとして「初めに言葉ありき」を掲げています。言葉は創造の原点です。言葉で感じ、言葉で考えているからです。たとえ無言でいても思考は言語思考回路を通ることを確信しているからです。歴史上のF皇帝の実験があります。

赤ちゃんは何も教えなかったら最初に一体何語を話すだろうか?という実験をしたといわれています。結果として食物だけを与えられても言葉を掛けられなかった赤ちゃんは次ぎから次に死んだと報告されています。言葉は単なる伝達手段ツールではなく、人の命を育むエネルギーを持っているのです。

人間は生まれた瞬間から死への旅が始まります。始まりがあるから終わりがあるから続きがあるわけです。

弊社では「すまい」を「巣が舞う」と書き「巣舞」と呼びます。巣は形、舞は想い！形になる前には必ず想いがある。その思いを大切にして巣舞づくりをすることはとても重要なことです。

私共が毎日やっている仕事である「巣舞づくりを通しての建築行為」は具体的には基礎を作り、土台を敷き、柱を立て梁を掛け渡して屋根をかけることで雨露をしのぎ外敵から身を守るシェルターをつくっていることになります。外部空間を作り、その後、床・壁・天井と内部空間を完成させます。鳥や動物のハードのすまいづくりとしてはこれでいいのですが、人間の個性を育む空間としては片手落ちになります。

我が家がどのようにあるべきか?主義主張もあるでしょうし、今後の我が家の在りかたを考えた時にイメージする理想とする空間を沢山思い描いています。すまいづくりは単なる箱作りでは無く個性ある「すま居方」の研究から始まります。

個性ある豊かな巣舞づくりをするための具体的手法の1つに、普段思っていることを〝言いたい放題・書きたい放題・思いたい放題〟として放題紙に書き連ねることを薦めています。そこから、あぶりだす様に「我が家だけの物語」が浮き上がってくるのです。マイ・ストーリーの誕生です。しかし、建築は第三者の目にも入る存在でもありますから景観環境に大きく影響を及ぼします。つまりヒズ・ストーリーにも成るのです。そして、それはヒストリーとなって歴史を刻みます。こうなるとれっきとした文化にもなります。

巣舞づくりが文化を育む存在だったのだと気がついた時に「育む」とは?を正面から一度ぶつかっていく必要に迫られたのでした。同時に弊社のキーワードに「趣舞＝趣味の舞い」とか「居場所探しの旅」とか「間知づくり」もあります。しかしそれらの深層を掘り起こしていくと「育む」という低層通音が流れていることに気がつきます。

「建築―巣舞―趣舞―間知―居場所―居方―育む」の囁きが必然的な流れとして私に迫ってきました。巣舞るメッセージ500回記念シンポジウムはそんな丁度良いきっかけになってくれることを期待しての開催です。

長岡花火は高田建築事務所と愉快な仲間達と打ち上げました。本日もパネラーの皆様には僭越ですが、愉快な仲間達ということでお願いしたところです。歴史家・稲川先生、建築家・斎藤先生、芸術家・秋山先生皆様と私の関係は稲川先生と秋山先生とは高校の同窓であり、斎藤先生は大学の恩師で居られます。又、同じプロジェクトを共有したりして育んできた上での選抜でもありました。しかも、その分野では皆さんは一流の方々ばかりです。

きっと「楽しく為になる会」であることを確信しております。